

シ強弱ハ、處ニ依時ニ依ニ非、唯大將ノ強弱ニ因レリ、今時畿内ノ兵勇氣膂ニ不徹ニ似タリト雖、楠ガ兵ハ皆勇智有テ、百萬ノ敵ヲ受テ守城シ、終ニ大利ヲ得タリ、

〔塵袋六〕後悔スルニハ、ホゾヲクフド不フユド其説如何、

左傳云、若不早圖、後君噬臍云々、杜預曰、喻噬臍、臍不及ト云ヘリ、顏氏曰、噬臍何及云々、ウツブキテクハントスレドモ、クワレヌハヘソナリ、クヤシキ事ヲシテ、トリカヘザントスレドモ、カナハヌハヘソラクハントスルニヲヨバズシテ、クハレヌガ如シトタトフル也、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮内卿相模守滋野朝臣貞主卒、略中嘉祥二年春兼尾張守、于時太宰府吏多不良、衰弊日甚、貞主上表曰、略中若無其人選、取辨官式部、頃年以來、絶而不行、近得飛語云、彼吏或擊目閉口似避時之人、或忘耻貪財爲聚斂之吏、府司國宰莫不悲傷、若如此不變、恐噬臍不及、略下

〔松屋筆記七〕女の膂より出し石の記

飯田町九段坂なる近藤五千石辰松君の家臣に、伊原佐助といふ人あり、齡は六十に近くて、妻の年は五十九ばかりになんありける、此妻今より七とせ八とせのむかしに病づきて、膂より長さ一寸或は二寸許の柔なる毛のさませし物を出すことおほかり、略中近きころは膂より出る毛はとゞまりて、角の端などいふべき物、やうやくにあらはる、遂にもぬけにもぬけて出ぬ、その長さ二寸あまり、幅は六分許にて、平やかなる石也、重きこと石にたがふことなく、擊にも石のひびきありてきこゆ、かくて日を経るまゝに金色の光出て、今は黄金の質にもまがふべきばかりになん、此ゆるよしは、佐助が同僚なる余が門人、上原建胤が物語をまゐるせしなり、文政元年十一月朔日、高田與清、

〔時還讀我書下〕膂中出屎